

日本スキー発祥物語

－黎明期におけるスキーと高田－

荒川 将

はじめに

明治44年（1911）1月12日、日本で初めての本格的なスキー指導が陸軍第十三師団歩兵第五十八連隊（現在の上越市高田）で行われた。この日、オーストリア・ハンガリー帝国のテオドール・エドラー・フォン・レルヒ少佐によるスキー指導を受けたのは、五十八連隊の14名の将校たちであった。レルヒは日本陸軍の視察を目的に来日し、明治44年1月5日から翌明治45年1月24日までの一年間余り高田に滞在した。レルヒと第十三師団長の長岡外史のめぐりあいは、高田でスキー指導がはじまる特別なきっかけだったのである。

レルヒが伝えたスキーは、瞬く間に高田から全国へ広がっていく。スキー講習会、スキー倶楽部、スキー競技会、スキー板の製作、スキー雑誌やスキー菓子、さらにはスキー踊りやスキー民謡など、それらはすべて高田からはじまった。いいかえれば、スキー技術、スキーの組織と普及、スキー用具、そしてスキー産業から文化まで、日本スキーに関わる事柄の源流といえる。その意味で、日本スキー発祥とは、ただ単に「スキーが伝来した」という意味にとどまらず、スキー術が広く全国へ普及し、スキーが一つの産業や文化へと発展していく、日本スキーのさまざまな事柄の「はじまり」（源流）を意味しているのである。

上越市高田の市街地を一望できる金谷山には、「大日本スキー発祥之地」と刻まれた記念碑が建っている。この記念碑は、スキー板を模ったデザインが特徴的であり、高田スキー団と高田市によってレルヒによるスキー指導の舞台となった金谷山に建立された（日本スキー発祥20周年記念事業の一環として昭和5年〔1930〕1月に除幕）。令和3年（2021）、レルヒによるスキー指導から110年の節目を迎えた。現在、1月12日は日本スキーのはじまりの日として「スキーの日」と呼ばれ、上越市は日本スキー発祥の地として広く知られている。

こうした日本スキー発祥史に関する研究については、山崎紫峰氏の『日本スキー発達史』を端緒として、小川勝次氏、中野理氏、坂部護郎氏、長岡忠一氏などによって多くの著作がある¹。近年の研究動向としては、体育学の分野におけるスキー史の研究が豊富な成果をあ

¹ 山崎紫峰『日本スキー発達史』（朋文堂、1936年）、小川勝次『日本スキー発達史』（朋文堂、1956年）、中野理『スキーの誕生』（金剛出版、1964年）、坂部護郎『はるかなるシュプール』（スキージャーナル、1976年）、長岡忠一『日本近代スキーの発祥と展開』（メディアKコスモ、1979年）

げている。たとえば、日本スキー史の古典的研究や原典的文献を丹念に検証した中浦皓至氏の研究が代表的である²。中浦氏は、レルヒによるスキー指導やスキー講習会、黎明期のスキー競技会やスキー倶楽部について検討を行っている。また、スキー指導を行ったレルヒに関する研究も厚い研究蓄積があり、レルヒの生涯とその人物的研究を体系化した新井博氏の研究やレルヒの日本観に関する池田弘一氏の研究、さらにはスキー指導にとどまらないレルヒの高田滞在中の交友関係に注目しレルヒと交流のあった高田の友人たちを紹介した池牆忠和氏の研究があげられる³。

いっぽうで、『高田市史』や『上越市史』などの自治体史では地域史の視点で日本スキー発祥史が論じられている⁴。しかしながら、「日本スキー発祥」（日本スキーのさまざまな事柄の「はじまり」）と上越地域との関係を分析した成果は自治体史以外には少なく、黎明期におけるスキーと高田の関係がどのように構築され、いかなる段階を経て展開していくのか、地域史の分野においてはさらなる日本スキー発祥史の解明は必要である。そのなかでは、スキー用具の供給に注目し、越信スキー倶楽部の指定製作所となった田中铁工場と黎明期のスキー普及をけん引した陸軍第13師団との関係を解明した新井博氏の研究は一つの指標となる⁵。

本稿では、これまでの研究成果に学びながら、日本スキー発祥の地高田は如何にして形成されたのか、上越の近代史においてスキーはどのような存在だったのか、改めて地域史の視点でふりかえりたい。黎明期におけるスキーの普及は、レルヒによるスキー指導を受けた陸軍第13師団を中心として、スキー倶楽部や新聞社が果たした役割が大きい。いっぽうで、地域がどのようにスキーを受容していくのか、この地域にとってスキーがどのような存在であったのか、スキーが地域といかなる関係のなかで展開していくのかなど、日本スキーの発祥地高田がかたち作られる過程（近代高田のまちづくりや地域における歴史意識の形成）について、改めて追跡する意義は大きいと思われる。本稿では、このような課題をふまえて、具体的には①黎明期におけるスキー製造と個人業者、②越信スキー倶楽部の名称について、③スキーと高田の関係について、「日本スキー発祥」をキーワードに検討したい。なお、上越地域に「スキー」がどのように受容されていくのかを追跡する一つの目印とするため、付

² 代表的なものとして、中浦皓至『明治・大正時代の高田 真相！日本雪艇の源流—その文献的研究—』（日本雪艇史研究所、2010年）

³ 新井博『レルヒ 知られざる生涯—日本にスキーを伝えた将校—』（道和書院、2011年）、池田弘一「レルヒの日本観に関する一研究—“Japan”における結語を中心として—」（『スキー研究』第11巻1号、2014年）、池牆忠和『レルヒ少佐一心に残る高田の友人たち—』（私家版、2018年）

⁴ 『高田市史』第2巻（高田市役所、1958年）、『上越市史』通史編5近代（上越市、2004年）。そのほか、上越地方のスキー工業（主に戦後の現状）について検討した赤羽孝之「新潟県上越地方におけるスキー工業—ある地場産業の崩壊—」（『歴史地理学』第146号、1989年）もある。

⁵ 新井博「黎明期におけるスキー用具の供給体制の確立—田中铁工場と高田第十三師団との関係を中心に—」（『体育学研究』第41巻2号、1996年）

録として『高田日報』明治44年1月から明治45年4月に掲載されたスキー関係の記事（スキー広告）を一覧にまとめたので、あわせて参照されたい⁶。

1 黎明期におけるスキー製造と個人業者の誇り—山善スキー店主の場合—

明治44年1月12日にはじまったレルヒによるスキー指導は、新聞や絵葉書などで広く宣伝され、一般へのスキー普及が図られた。高田の小熊写真館が発行した「スキー絵葉書」には、レルヒやその指導を受ける将校たちの様子を見物する多くの市民が写っており、スキーへの興味関心の高まりをうかがわせる。

スキーを広く普及させるためには、スキー用具の供給は不可欠の課題であった。黎明期のスキー用具の供給については、新井博氏の研究が重要である。新井氏によれば、当初は大工を中心とした個人による業者が用具の製造販売をはじめたものの、急速に高まる人々のスキーへの関心に対応するため、第13師団は大規模で優れた工作能力を持つ直江津の田中鉄工場にスキー製作の指導を行い、優れたスキー用具を製造販売するまでに育てあげ、あわせて田中鉄工場は越信スキー倶楽部の指定製作場となり、スキー倶楽部の展開とともに各地に代理店を設けるなど、スキー用具の販売システムを確立したという⁷。田中鉄工場は、第13師団の指導を受けながら、皇室へのスキー献上や特許の取得など、黎明期のスキー製造を牽引する存在だったといえる⁸。

いっぽうで、スキー製作のはじまりについては、第13師団に出入りしていた御用商人や大工など、個人業者によるスキー製造の展開も見逃せない。『高田日報』において最初にスキー製造の広告を出したのは高田茶町の山善靴店であるが、昭和3年（1928）2月9日付の『高田日報』に「生みの悩みと誇り」という興味深い記事が掲載されている⁹。記事は、「自信のついたのは三年後 安物扱ひにされて意地張る 全市二十萬円の輸出に 得意満面の山善スキー店主」という見出しではじまっている。

【史料1】

その頃の苦心談は取りたてて申し上げる程のこともない（中略）過ぎ去つて見ればネ馬鹿々々しい努力を拂つたものサ（中略）レルヒ中佐がスキーを持参し十三師団が普及に努めてゐても、市民は冷淡なもので嘲笑的態度だつたものです、それで拵へても売れぬものを店に列べた処で仕様がなるとこの方面の研究も兎角疎かになりがちです、しかし雪の為に征服されて冬眠を貪る市民に何とかして真のスキーを理解せしめたいと

⁶ 上越地域には当時『高田日報』と『高田新聞』という二つの主要な新聞があったが、ここでは一例として、日本最初のスキー倶楽部である高田スキー倶楽部の創設を提唱し、黎明期におけるスキー普及を第13師団とともに牽引した高田日報社が発行した『高田日報』を選択している。

⁷ 前掲註5 新井論文

⁸ 新井博氏は、田中鉄工場を「大正初期から中期にかけて高田における製造販売業を質的量的に代表する存在」と評価されている（前掲註5 新井論文）。

⁹ 『高田日報』昭和3年2月9日付「生みの悩みと誇り」（上越市立高田図書館所蔵）

は初めから私の念願でした、用材は何にしたらよいか、金具はどうするか、一人工場で考へ込んだものです」「師団から注文があつても高田では出来ないといふ惨めさです用材の選択も金具もやつとこれでいゝと自信のついたのは三年後くらいだつたでせう、軍隊から中等学生小学生、女学生等とかくて漸く高田地方はスキーとはどんなものかといふことだけははつきり判るやうになつた、その後大人もので五六円だつた処がスキーは各地で出来るから二三円で沢山だと新聞に書きたてられ事実五六円でなければ手間代もないのだつたけれどもそこが商人の意地でそれに刺戟されて損を繰り返しながらも対抗して来た、その中に需要家からあれ、これといろいろ（く）と注文されるやうになつた、悩みは今も昔も変りはありません、しかしスキーの発祥地として恥しからぬものをお互に責任をもつて製作し高田のスキーでなければならぬといはれるやうになつたことを何よりも喜んで居ります」と如何なる商人も辿る創業の悩みから高田の唯一の生産物として二十萬円の輸出を見るに至つた誇りを語り終つた

山善スキー店主（山善靴店、山田善四郎）による回想では、スキー製作をはじめた当時の苦悩と市民へのスキー普及（「真のスキーを理解せしめたい」）の思い、さらには「スキーの発祥地」として恥ずかしくないスキーを「お互いに責任を以て」製作し、高田のスキーでなければならぬと評価されていることへの誇りが語られる。この記事では、昭和初年にスキーが「高田の唯一の生産物」と称されるような産業に成長している様子がうかがえるが、ここではスキー製造に携わった個人業者が「スキーの発祥地」であることを誇りに、同業者と切磋琢磨しながらより優れたスキーづくりを志向していた点に注目したい。

この山善スキー店（山善靴店）は、明治45年2月11日の越信スキー倶楽部発会式にあわせて「高田スキー組合」の広告を、大槻商店（堅春日町）・報国商会（五十嵐弥吾八、横町）・永井佐吉（大鋸町）・横山喜作（下田端）・月岡源吾（御馬出）・藤井金治（本杉鍛冶町）・松浦長三郎（下紺屋町）らとともに掲載している¹⁰。「高田スキー組合」については、具体的な動向はなかなか判然としないものの、黎明期において個人業者らが協同しながらスキー製造に励む熱気を感じさせる。

上記のうち、横山喜作は第13師団の山口十八大尉が考案した「山口式スキー」の製造・販売を任された人物である。山口式スキーは、わらで作った雪靴を着帯する程度の簡単な構造であったが、スキー熱の高まりをうけて一般市民でも買える安価なスキーとして登場した。なお横山は、山口式スキーだけでなく、奥国式スキーや諾威式スキーも「五八連隊研究委員鶴見大尉の指導を得て」、「高田スキー製作の魁」と称して製造販売を行っていた¹¹。

また、同じく月岡源吾（月岡鉄工場）は、スキーの金具製造で優れた技術を発揮した人物

¹⁰ 『高田日報』明治45年2月11日付「祝越信スキー倶楽部発会式 高田スキー組合」（上越市立高田図書館所蔵）

¹¹ 『高田日報』明治44年2月19日付「横山のスキー」・スキー製造販売の広告（上越市立高田図書館所蔵）。当初は製造販売を行っていた横山喜作だが、大正時代中頃からは販売を大原電機機械店（中小町）に任せ、製造だけに専念するようになったという（前掲新井論文注5参照）。

で、「奥国式スキー金具製造元祖月岡鉄工場」として評判であった¹²。月岡鉄工場は、先の横山喜作と連名での新聞広告を掲載しており、横山喜作の製造するスキーには月岡鉄工所製の金具が使用されるなど、協同でスキー製造を行っていたと思われる。なお、月岡鉄工場でもスキー製造が行われており、「月岡式スキー」と呼ばれていた。当時、月岡鉄工所に勤め、後に清水自転車店（上越市南本町3）を営んだ清水重則氏を紹介したブリヂストンスキーの広告には、「日本最初のスキー製作にたずさわったただ一人の現存者。今も元気に高田に住んでいる。明治43年11月、月岡という鍛冶屋に年季奉公にいていた清水重則らは高田の13司令部から召集を受けた。なにごとかと不安な気持ちで出頭すると、そこには2台の細長い板切れがあった—これは当時のスウェーデン公使杉村虎一が陸軍省に寄贈した北欧製のスキーであった。そこで清水重則らは、歩兵第58連隊長堀内大佐から、これと同じものをつくるように命じられた。清水重則は締め具の製作を担当させられた。それから1ヵ月後、数々の苦心の末、日本最初のスキーが誕生したのである。」と、スキー製作のはじまりについて回顧されている¹³。

黎明期のスキー製造は、第13師団直伝で大規模な生産能力を持つ田中铁工場と大工や靴店・鉄工所などの個人業者という二つの系統で展開していく。高田におけるスキー生産は、大正9年（1920）が4,500台、同10年6,300台、同11年15,000台、同12年18,000台、同13年21,000台と年々増加していき、昭和9年（1934）には34,000台に達している。大正14年2月16日付の『高田日報』で「日本第一の製出高」と紹介されるように、全国のスキー製造を牽引する一大産地へと発展するが、その基盤には「スキーの発祥地」としての「生みの悩みと誇り」を語った山善スキー店主をはじめ、スキー製造に携わる個人業者が支えていたのである¹⁴。

2 越信スキー倶楽部の誕生と愛郷意識

日本におけるスキー倶楽部の嚆矢は、レルヒによるスキー指導から間もない明治44年2月に創設された高田スキー倶楽部である。高田スキー倶楽部は、スキーの乗用により元気を鼓舞し、健やかなる体力の養成を目的に、高田日報社が提唱し創設された。この高田スキー倶楽部は、全国へのスキーの普及・発展を目的に、翌明治45年2月に越信スキー倶楽部（結成は明治44年10月、正式な発会式が翌45年2月11日）となり、さらに同年10月には日本スキー倶楽部へと発展した。

越信スキー倶楽部は、第十三師団長の長岡外史が会長になるなど、レルヒのスキー指導を受けた陸軍第十三師団が中心となり、新潟・長野両県の協力のもと誕生した。急速にスキー熱が高まる中で、長野・長岡・山形・小樽・東京などにつぎつぎと越信スキー倶楽部（日本

¹² 「スキー定価表（田中铁工場、大正元年10月）」（『上越市史』資料編6近代、平成14年）383～390頁

¹³ ブリヂストンスキー「雪艇（月岡式スキー復刻版）」広告（日本スキー発祥記念館所蔵）

¹⁴ 『高田日報』大正14年2月16日付（上越市立高田図書館所蔵）

スキー倶楽部）の支部が創設され、各地域におけるスキー普及の拠点となったのである¹⁵。

さて、越信スキー倶楽部の名称については、当初「信越」スキー倶楽部という案が有力だったものの、長岡外史の意見で「越信」と決まったといわれている。長岡外史の二男である坂部護郎によると、「鉄道は信越線であり、新聞の名も信越日報と新潟、長野両県の仕事には長野が先である。これは東京に近いからだろうが、スキーはちがう。スキーは新潟県で発祥して長野におよんだのだから、越後が上だ。だから越信スキー倶楽部にしたまえ。語呂が悪いのなんか、この場合問題ではない」と、日本スキー発祥の地を意識した長岡外史の強い意向でまとまったという¹⁶。このことを裏付けるように、明治44年10月4日付の『高田日報』には越信スキー倶楽部組織会の記事があり、「師団長の意図に基き越信スキー倶楽部を組織し既に講習を終わりとる者は地方に帰りて越信スキー倶楽部支部を組織し本部たる越信スキー倶楽部に於て統一する事とせば、漸次スキー術の盛大を見るべし名は初め信越スキー倶楽部とせしも師団長は本部は越後に在り高田市を中心として研究せらるる故との事にて越信スキー倶楽部と名命する事となれり」と、越信スキー倶楽部の創設と名称の顛末について報じている。

このような越信スキー倶楽部の名称については、明治45年1月26日付の『高田日報』に興味深い記事がある¹⁷。高田日報への投書と思われる「南爽生」なる人物の「偶感一束」と題された記事では、「信越」スキー倶楽部ではなく、「スキーの発祥地たる高田市」がある越後を頭首に冠した「越信」スキー倶楽部の名称を称賛している。

【史料2】

- ◎信越スキー倶楽部は甚だ気に入った名称なり第一には発音が流暢軟弱でなくして何となく雄健豪宕の氣象を表はし自然山谷を縦横に馳駆するの意を含み第二には日本に於けるスキーの発祥地たる高田市一其所在地たる越後一を頭首に冠せる点にあり
- ◎全体『信越』と云ふが如きは之は信州人の称ふべき言葉にして越後人が卑屈にも之を唱和して恥ぢざるが如きは謂れなきとなり日英同盟と云ふ時に日本では日を先にし英国では英を先にすると云ふ様に世界各国とも皆自国を先きにして他国を後にするは敢て先方を侮るに非らず自国の尊嚴を保つ為めでなり
- ◎自今以後越後にありては決して例へば信越線とか信越何々とか様に信州を先きにし自国を後にするが如き卑屈の言語を用ひざることすべし宜しく堂々と越信と称すべきなり此事は年来余が念頭に在りしが端なくも越信スキー倶楽部にて同感者あるを發見し愉快に堪ざるところなり

この記事の特徴は、「越後人」としての矜持や郷土愛を直截的に示している点にある。具体的には、鉄道の信越線など当時から新潟・長野両県を示す際に使用された「信越」という

¹⁵ 前掲註5 新井論文

¹⁶ 坂部護郎「スキー事始めと乃木将軍」（現代スキー全集第5巻『スキー発達史』、実業之日本社、1971年）

¹⁷ 『高田日報』明治45年1月26日付「偶感一束」（上越市立高田図書館所蔵）

語に対して、日英同盟を例に「自国の尊厳を保つ」というナショナリズムを持ち出しながら、越後人が「越信」と称することの正当性を主張している。この記事では、「越後人」には越後人の、「信州人」には信州人の、それぞれの地域に拠って称すべき言葉があるという愛郷意識を感じさせる。ともあれ、越後人による火を噴くような言説であり、越信スキー倶楽部の名称について「愉快」に堪えないと結んでいるものの、肝心の冒頭で「信越」スキー倶楽部とあるのはご愛嬌だろうか。

このような「越後人」たる地域意識は、「スキー」が登場し、越信スキー倶楽部の名称をきっかけとして、顕然と立ち現れてきたようである。「スキーの発祥地」という意識が地域のアイデンティティーの形成に深く影響を与えていることを示している。

3 黎明期におけるスキーと高田

黎明期におけるスキーと高田の関係はどのように表現され、同時代的にいかなる評価を得ていたのだろうか。ここではまず、高田スキー倶楽部が創設された直後の明治44年2月21日付『高田日報』の評論「スキーと高田」を取り上げたい。

【史料3】

（前略）スキーは今や単り軍隊に於ける研究に止らず弘く一般の研究愛用する処とならんとしつつ在この事実なるを認め得べし、而して又之れと同時にスキーは漸く高田専有の物にあらずなりたるを知り得らる、スキーの県下に普及すること可なり、日本全国雪の在る地方に普及すること大いに可なり、然れども吾らは何とかしてスキーと高田なる名を離し度くなき感せらる、高田は日本最初の研究地なるが故に而して日本有数の深雪地なるが故にスキーの今後益々発達流行するに連れて永久に高田なる名の忘れられざらむことを望むの念頗る切なり、スキーを全国に紹介したる者は高田なり、その高田がスキーと離して呼ばるるを嫌ふは矛盾の感あり、（後略）

この記事では、スキーが軍隊における研究にとどまらずに広く一般に普及する現況を報じ、スキーが「高田専有」をはなれ、新潟県下をはじめ日本全国へと普及していく様相を推奨している。いっぽうで、スキーと高田の名が離れていくことへの忌避感をにじませ、日本最初の研究地である高田の名が永久に残ることを切望している。ここでは、スキーが雪国の交通具として、さらに冬季の体育向上のために広く全国に普及していくことを望みながらも、結果的に「高田専有」でなくなるがゆえにスキーと高田の関係が断ち切れてしまうことを恐れる、「矛盾の感」が端的に表現されている点に注目したい。

こうしたスキーと高田の関係については、翌明治45年に入ると、新たな段階を迎えていることが同年1月7日付『高田日報』の「近視眼」（高田日報記者の論説）からうかがえる。

【史料4】

- ◎越信スキー倶楽部及同高田支部発会式はいよいよ来る廿一日に催さることに決し昨日はその準備その他に関して協議会開かる、
- ◎今やスキーは高田市自身が思惟し居るよりも一層深き関係を高田市との間に有する

- が如くに取沙汰せられつつあり、而して同時に高田市は之れにより利せんとす、
- ◎此の取沙汰たるや之れを利用すれば即ち取沙汰を喚起するだけの努力を為さずして尚ほ且つ十分に之れを有用に使ひ得る訳なり、
 - ◎高田市が雪を征服すべき運命を荷ひつつある第一着として先づ雪を征服すべき器具を充分に征服し雪の高田市即ちスキー、スキー即ち雪の高田市たる位置に進めざるべからず、
 - ◎而して今や軍隊側の努力は地方の人心を刺戟すること少からざるものある以上は高田市は義務として傍観座視すべきにあらず、
 - ◎再三再四の事ながら高田市が積極的に越信スキー倶楽部の活動に努力する処あるべきを勧奨せざるべからず、此の提唱勧奨は再三再四に及びたるものあるを見ざるが故に敢て此の言を為す、

越信スキー倶楽部の発会式を間近に控えたスキー熱の高まりの中で、この記事では、スキーの存在が、高田市自身が考えるよりも一層深い関係を高田と結んでいること、こうした状況を高田市が有効に活用するべきであることが提唱されている。雪深い高田市にとって雪は「征服」すべき対象であり、雪を征す器具であるスキーこそ高田市が征すべしという。ここでは「雪の高田市即ちスキー、スキー即ち高田市」となることを強く主張されている。こうした表現は、スキー普及に積極的な第13師団と対比する形で高田市の姿勢を評価したものであった。

また、第13師団長の長岡外史は、「新春を迎ふる高田市民の覚悟」と題した記事の中で、「高田は更にスキー発祥の地たるなり」と述べたうえで、スキーと高田の関係をスケートと諏訪、桜と向島を例にあげて、「スキーは高田の呼物」として「不可離の将来」を有するとまとめている¹⁸。

このように明治末年の段階では、近代高田のまちづくりにおいて、スキーとの関係如何が重要視されていたことを物語っている。同時に、スキーと高田の関係と考えるとき、「高田」の意味には大きく「高田人」と「高田市」という二つの要素があることも認められる。

最後に、スキーと「高田人」について示唆的な記事を紹介してむすびとしたい。明治45年2月3日付の「高田の発展策」では、「何にしても高田はスキーの根元地たる事基礎丈けは完全に固め置ける積りなり此を毀すも愈々発展せしむるも其は高田人の意気如何にあるのみと云へり」とあり、第13師団や越信スキー倶楽部（附属製作場の田中铁工場など）の存在によって、高田は「スキーの根元地」としての地位を得たものの、高田の発展につながるスキーとの関係を壊すも有効に活用するも「高田人」次第であるという¹⁹。黎明期のスキーと高田の関係においては、「高田人」あるいは「高田市」のそれぞれ主体的な態度が問われていたのである。

¹⁸ 『高田日報』明治45年1月1日付「新春を迎ふる高田市民の覚悟」（上越市立高田図書館所蔵）

¹⁹ 『高田日報』明治45年2月3日付「高田の発展策」（上越市立高田図書館所蔵）

おわりに

本稿では、明治44年1月のレルヒによるスキー指導から翌明治45年2月の越信スキー倶楽部の創設（発会式）のころまでを中心に、上越地域にとって「スキー」がいかなる存在であったのか、高田という器の中でレルヒの蒔いたスキーの種がいかに花開いていくのか、日本スキー発祥の地高田がかたち作られる端緒を、「日本スキー発祥」をキーワードに追跡してきた。

黎明期のスキー製造は、第13師団直伝で大規模な生産能力を持ち越信スキー倶楽部の附属製作場となった田中鉄工場と、大工や靴店・鉄工所などの個人業者という二つの系統で展開した。大正時代には、全国のスキー製造を牽引する存在に発展していくが、山善スキー店主が語った「スキーの発祥地」としての「生みの悩みと誇り」がそれぞれの製造業者の基盤にあったのではないだろうか。

黎明期におけるスキーと高田の関係を表現する言葉としては、「スキーの発祥地たる高田市」・「高田はスキーの根元地」・「スキーは高田の呼物」など、「高田といえばスキー、スキーといえば高田」を強く意識する言葉が並び、日本におけるスキー発祥の地であることを象徴させている。このことは、越信スキー倶楽部の名称に関して「スキーの発祥地」であることと愛郷意識が強く結びついたこととあわせて、「スキー」が近代の上越地域のアイデンティティー形成に大きな影響を与えたと評価できるだろう。

黎明期においては、レルヒからの指導を受けた陸軍第13師団を中心として、高田スキー倶楽部を創設した高田日報社などの新聞社や越信スキー倶楽部がスキーの普及に果たした役割は少なくないが、「スキー」を地域の発展（まちづくり）に繋げることができるのか、その成否については、主体としての「高田」の態度が問われていたのである。

（上越市立歴史博物館 主任〈学芸員〉）